

2017年7月23日 日曜日

小説に求められる品質とは？

『血か、死か、無か？』は、1万文字を書いて、進捗は約17%。なるほど、考えさせられるなあ、と思いながら書いています。ほかに仕事はないので、いろいろ考えてしまい、ちょっと邪魔なくらい。

Wシリーズは、自分ではSFだと思っていますが、しかし、SFというのがどういうものかよく知らないので、断言はできません（これは、ミステリイに対しても同様でした）。どちらも、自由に書いているつもりで、読んだ方にどう受け止められても、それもまた自由です。作者は何を語りたかったのか、という国語の問題ではありません。

今日は、現在製作中の機関車の試運転をしました。全然未完成なのですが、走行装置はほぼできているし、昨夜に電気配線をしたため、試験がしなくなったのです。メインラインを1周だけしてきました。なかなか快適です。4軸8車輪がすべて駆動するので、おそらく我が欠伸^{あくび}軽便鉄道で最強の機関車になるでしょう。最強だったら、どんなことができるのか、という点では、特にこれとってなにもありません。沢山の乗客を一度に運べるかもしれませんが、そんな乗客はいませんし、また客車も作っていないので、試すこともできません。

最近、芝刈り機が故障し、これをかなり荒治療をして直しました。部分的に破壊したところもあって、そういうところは木ネジで止めたりして、見た感じもオンボロになりました。昔、アニメで爆発に遭遇したあとに、こういうふうになったよなあ、と思いました。でも機能的には完全復活です。

その次に、草刈り機が壊れました。これはプラスチックの部品が割れてしまい、修理は無理なので、その部品をネットで調べて取り寄せました。比較的新しい製品だったし、メジャーなメーカーだったので、部品が出回っていたわけです。消耗品だと思っていた部品の方はまだ大丈夫で、「こちらが壊れるのか」という意外な箇所が割れたのです。こういうのは、何年も使ってみないとわからないものです。メーカーもデザイン段階でわかっていたとは思えません。でも、部品を供給しているのは、事例が多くあったためでしょう。

ものが壊れると、いろいろ学ぶことができます。壊れ方をよく観察することで、対策や次の設計のために重要なデータが得られます。そもそも、壊れないと、耐久性というものは不明のままです。壊れて初めて、寿命がわかり、強度がわかります。自動車でいうと、ル・マンなんかで勝つチームは、これをよく知っているのでしょう。

最近では、そこまでとことん使う人は少数で、壊れても良いから安いものが欲しい、と考える人が多くなっているのかもしれませんが。それも理屈の一つです。「いや、品質が一番大切だ」と拘ることが最善ではない、と僕は思います。日本のメーカーは、最初は「安さ」で世界進出したのに、いつの間にか「高品質」に拘るようになり、高くても品質が良ければ、きっとユーザに理解される、という「願い」を抱き続けてきました。気がつくとも、家電メーカーはほぼ全滅に近い状態。さて、自動車メーカーはいかがでしょうか？

小説も同じだ、と僕は考えています。デビューしたときから、この考え方はずっと変わりません。小説の品質とは何か、という点では議論があると思いますが、作者が込めた品質の高さは、必ずしも読者が求めているものではない、というズレは、ずいぶんまえからあったと思います。



そもそも「質」というものが、主観的である事例が多いようです。

イラスト/コジマケン